# 山陰デスティネーション

## ～終わりのないノスタルジア山陰～

平成 30 年 9 月 19 日

松江北高 29 期、53 年卒　丹羽　実

最近、東京の JR 車内や駅でも“山陰デスティネーション”の文字を多く見かけるようになりました。
松江にはずいぶん帰っていませんでした。街の様子は友人の便りで知ることができましたが、無性に今の様子を見てみたくなり、夏の終わり久しぶりに松江に帰り、自分の足跡を辿りました。

中学生のころは、自宅のある淞北台から奥谷への切通しを越えて、当時松江第一中学校のあった赤山に通っていました。
久しぶりに、この道を歩いてみることにしました。
奥谷へ切通しは通っていたころと変わりませんが、隠岐の島や奥出雲から出てきた同級生がいた下宿があったあたりは、きれいな住宅街に様変わりしていました。

奥谷を抜け細い路地を抜けると春日大社に出ます。春日大社は、小学生の終わりから中学までの通学の途中の遊び場でした。大きな鳥居を抜けると広場があり、何をしていたかは覚えていませんが日の暮れるまで遊んでいました。
鳥居を抜けて右に折れしばらく行くと一中のあった赤山への裏道があります。

子供心におどろおどろしい気配を感じていた裏道も、今は、おしゃれな工房や隠れ家喫茶があり明るい雰囲気に変わっています。
路地を曲がると急な階段が見えてきました。
赤山に通っていたころは、墓石を使っていると噂された古い石の階段もコンクリートに整備され手すりもついていました。この階段のあたりは、低い笹が茂っていてマムシがでるから注意するようにと言われたものです。
急な階段を一気に登ると二本松の裏手に出ました。
二本松をぐるりと巻いた石段は、そのままでしたが、もう当時の重厚な二本松はなく、小ぶりな松がポツンとひとつ曇り空に浮かんでいました。
一中から北高に主を変えた校庭ではサッカー部の生徒が熱心に練習をしていました。
私が中学生のころは男子更衣室がなく、校庭で体育の授業があるときには太い二本松の根元の日陰で着替えていたのが懐かしくもあり、日陰も作れない小さな松に寂しく思いました。
校庭を抜け赤山の坂を下ると塩見縄手です。城山の堀が広がり、堀川遊覧船も見えます。
塩見縄手を武家屋敷と反対方向の左に進んでいくと、今は朽ちてしまった宇賀橋が見えてきます。
宇賀橋は古くからある橋に見えますが、私が中学生のころに架かった橋で当時は薄緑の欄干が堀の緑に浮き上がっていました。

宇賀橋わたると左に“ホーランエンヤ伝承館”が見えてきました。
ホーランエンヤは 10 年に一度行われ、次は 2019 年 5 月 18 日(土)～26 日(日)、ちょうど元号が変わった直後に開催されるそうです。
私も小学生のころホーランエンヤを初めて見ましたが、宍道湖で繰り広げられる勇壮な祭りは記憶に残っています。松江を離れてから見る機会はありませんでしたが、華やかな伝承館の幟を見ていると、もう一度目に焼き付けたくなります。

この伝承館のあたりで忘れられないのが、今はもうありませんが“平田屋”のうどんです。トロトロのうどんで美味とは程遠いものでしたが何故か通ってしまう不思議な魅力がありました。
塩見縄手から宇賀橋を渡り石垣の間から大手前広場が見えてきました。
大きくひろがる広場は高校時代の淡い思い出の残る思い出の場所です。
訪れた時も、ちょうど灯籠が配置されていましたが、今は色々なイベントが開催されているようです。
大手前広場から広い石段を登り左手の二之丸には、お城に似合わない西洋風の建物“興雲閣”が見えてきました。昔は古めかしい展示だけでしたが、今はカフェも備えた観光スポットです。
子供のころの記憶は興雲閣から県庁に下る急な石段の印象が残っています。石段を下る途中から見る松江城の堀は四季それぞれに景色を変えていました。二之丸からの石段を下りきると島根県庁に突き当たります。右に行くと“県図書”と呼んで待ち合わせ場所や数少ないデートスポットだった県立図書館が今もそのままに残っています。県庁を左に折れるとアーチ形にブロックを組み合わせたオブジェと芝生の上に広がるストーンヘンジを連想させる造作物が目に入ります。これらは、ここに来るずっと前に市役所前の末次公園にあったと思います。

県庁前には、今も広々とした芝生と松、石のモニュメントが残っていました。今から 50 年以上前、昭和 39 年の東京オリンピック際には、この広場にも聖火がやってきて、金色半円形の洗面器のような聖火台に火がともったのを想い出します。
2020 年に再び東京の地で開催されるオリンピックの聖火もまた、この地に燈るのでしょうか。
県庁前からレイクラインという観光バスに乗りヘルン旧居前で降りると松江城を囲む堀が大きく広がります。ヘルン旧居前を左に折れると長屋が見えてきました。この長屋は今でこそ工房が入っていますが、かつては友人の家であり、高校の同級生の下宿でした。はめをはずして友人の下宿の格子戸から見た靄のかかる堀の朝は忘れられません。
ヘルン旧居から黒田町に抜ける道の右には、“神代そば”があります。私にとって神代そばは、殿町の一畑百貨店地下にあるカウンターのお蕎麦屋さんでした。出雲そばの大好きな私でしたが、何よりの御馳走は一畑百貨店のカウンターで食べる“冷やし山かけそば”でした。高校を卒業し松江を離れるときの最後の食事も一畑百貨店の山掛けそばでした。「しっかり頑張ってくるのだよ」と声をかけてくれたのも蕎麦屋のお姉さんでした。その蕎麦屋さんが“神代そば”だったのを知ったのはずいぶん後のことでした。なります。数年前に今の地に移転した“神代そば”に立ち寄った際に品書きにない“冷やし山掛けそば”を注文してみましたが当時と同じ濃厚なつゆと一緒に薫り高い蕎麦が出てきました。それ以来、”神代そば”は松江に帰った時には松江駅の一福とともに必ず立ち寄る店になりました。

”神代そば”をすぎると四十間掘りに沿って法吉から北松江まで続く広い道に出ます。

自分が幼いころは、まだ田んぼで法吉から北松江に向かうには、里山と田んぼの間の舗装されていない道を迂回するしかありませんでした。
道の両側に広がる水田は冬になっても水をたたえたまま青々とセリが育ち、春になるとあぜ道いっぱいにレンゲが咲いていました。
レンゲの季節に帰ることのなくなった今は、どんな風景なのでしょうか。北松江に向かっていくと右手に古い教会が見えてきます。教会を左に曲がってずんずん行くと赤山から移転した松江一中と月照寺が見えてきます。

月照寺は、ずいぶんきれいに整備されていましたが、一中は赤い線の入った自転車ヘルメットも変わらず、まぶしい思い出の校庭もそのままでした。変わっていないものを少しでも見つけるとホッとしてしまいます。
教会まで戻るときれいになった四十間掘りの傍らに園山俊二さんの記念碑がありました。園山さんにお会いする機会はありませんでしたが、この近くに住んでいらした園山さんのお母さんが餅つきのお世話をしながら、つきたての餅で餡をくるんでくれたのを思い出します。

北松江に近づくと幼少期に住んでいた見覚えのある末次町が見えてきます。街並みもほとんど変わらず、小さな公園もそのままでした。公園前の石屋さんも当時のまま、店先にいた大将はずいぶん変わっていましたが子供のころ遊んだ面影が残っていました。
とてもきれいになってしまった北松江駅からバスに乗り、旅の終着点 松江駅に向かいます。車窓からは銀色の天体観測ドームが目印の松江市役所が見えてきます。北高生のころには、このドームで天体観望会を何度も開いた思い出の場所です。
この旅のきっかけは、あの観望会で一緒に星を眺め、今もここに残る後輩が発信してくれる懐かしい故郷の空でした。
私にとって故郷の空は、終わりのないノスタルジアなのかもしれません。

＜ブラウザ左上に戻る＞